

日本学術会議 科学者委員会
学術誌問題検討分科会（第4回）議事要旨

1. 日 時： 平成24年8月28日（火）16：00～18：00
2. 場 所： 日本学術会議 5-C（1）会議室
3. 出席者： 浅島委員長、北里副委員長、植田幹事、田口幹事、小松委員、辻村委員、嶋田委員、北村委員、松岡委員、吉田委員、古田委員、谷藤委員、永井委員、林委員（欠席：矢野委員、須田委員、長野委員、玉尾委員）
事務局：守屋事務官 他
4. 配付資料：
 - 資料1 前回議事要旨（案）
 - 資料2- 1 J-STAGE 関連資料
 - 資料2- 2 J-STAGE3 の状況について
 - 資料3 eLIFE Mark Patterson / SPARC Japan Seminar, August 23rd, 2012
 - 資料4 日本の学術誌の発信力を強化するモデル案
 - 参考1 委員名簿
 - 参考2 科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会「学術情報の国際発信・流通力強化に向けた基盤整備の充実について」（平成24年7月）
5. 議 事：
 - （1）開会に先立ち、浅島委員長より、学術会議年報に掲載する各分科会活動報告をまとめ、事務局に提出した旨の報告があった。
 - （2）前回議事要旨（案）を承認した。
 - （3）最近のJSPSの学術誌に対する現状
浅島委員長より、日本学術振興会が9月1日付けで公募する刊行助成事業の概要が紹介された。新しい刊行助成事業は、1）国際情報発信、2）Open Access（OA）対応を軸にしたものになる。新しい事業では、質の高い国際誌となるための editing staff の登用、英文校閲などに助成金を使えるようになる、5年間継続した事業である、分野ごとに leading journal を作ることが期待されているなどの特徴が有る。なお、学問分野の多様性は尊重される。
（質疑）
 - ・ 5年間の意味は何か？ 情報発信プラットフォームを作る試行期間であり、問題点は検討し、変更もあり得る。
 - ・ leading journal の意味？ 新しいジャーナルを作る以外に、既存のジャーナルを押し上げる企画も歓迎する。
 - ・ 冊子体を認めるか？ ケースバイケースである。

- ・ 評価の視点はどこか？ どれくらいの人を読んでいるかを access 数、download 数などから判断することになる。評価委員会は、学協会の代表、編集実務者、学術会議分野代表などになるだろう。
- ・ 予算の立て方は？ 色々な提案が有る。たとえば、3 年単位で立てて行くことも考えられる。大事なのは、学協会連合などが、どれくらい真剣に国際情報発信を行おうとしているかが見えることである。Editor in chief として国際的に知られた人たちによる長続きする組織を作ることなどが重要である。
- ・ 連合体を作って対応することを奨励しているが、国際連携はありうるのか？ まずは、日本の中の連合体が期待されるが、将来的にはアジア連合も視野に入れてもよい。

（４）学術誌を巡る最近の動きなど

永井委員より、J-STAGE の問題点が紹介された。また、近々BioMedical 分野で作られる eLIFE のコンセプトが、SPARC Japan Seminar での発表資料をベースに紹介された。eLIFE は、研究者の立場に立ち、予算を気にせず上質の科学を発信しようという理想に燃えたジャーナルである。

（５）今後の分科会の取り組みと役割

谷藤委員から、前期に出された提言を具現化する案が示された（資料４）。国際情報発信を目指した leading journal が作られる動きに呼応して、それらの注目論文を集めたバーチャルジャーナルを作る。それを、科学者コミュニティーの協力、図書館などの機関レポジトリなどの中間インターフェース、新しい情報メディアである facebook, twitter, Researchgate などの新しい発信手法を用いて運用して行くという案である。

（質疑）

- ・ 事業主体はどこか？ たとえば、学術協力財団。
- ・ 全分野を対象としたものではなく、できる分野から行ってはどうか。

（６）その他

次回日程と検討事項

平成 24 年 11 月 2 日（金） 16:00～18:00 eLIFE に対抗できるバーチャルジャーナルの具体案を考える。各分野に於ける leading journal の現状を把握するとともに、ビジネスモデルを検討する。